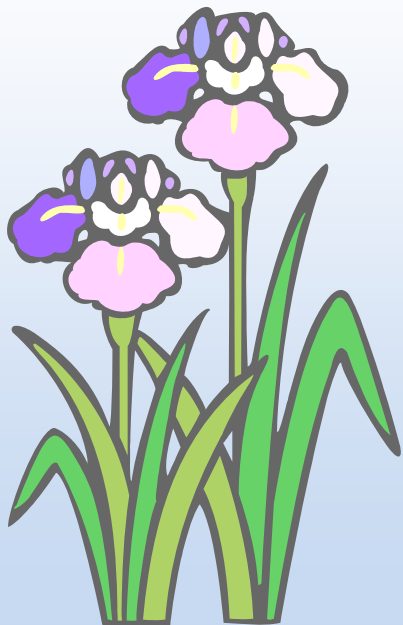


スクールカウンセラー活用リーフ



問題行動の未然防止に向けて

愛知県生徒指導推進協議会

スクールカウンセラーの仕事が、相談活動だけになっていないでしょうか。
新たな問題行動を発生させない「未然防止の視点」からの生徒指導が求められています。
すべての児童生徒を対象としたスクールカウンセラーの活用を積極的に進めましょう。

第1段階 未然防止

すべての児童生徒に

問題が起きる前に起きにくい環境をつくり、資質を育てる
(転ばない環境を整えたり、転びにくい力を育てたりする)

第2段階 初期対応

一部の児童生徒に

問題になりそうな児童生徒の早期発見や兆候の見られる
児童生徒への早期対応 (転びそうになっている子を支える)

第3段階 事後対応

特定の児童生徒に

既に問題化した事象に対する個別の支援
(転んでしまった子に手をさしのべる)



◆ 授業を見てもらう

子どもや学級集団の良さや課題、先生と子どもの関係の良さや課題など、学級づくりや授業づくりのヒントになる情報を得ることができます。

◆ 校内を巡回してもらおう

校内の環境、休み時間の子どもの言動から、子どもや学校全体の良さや課題など、学校づくりのヒントになる情報を得ることができます。

◆ 学校・学年行事を見てもらう

学校・学年行事がねらい通りに子どもを成長させるものになっているか、課題は何か、次にどう生かすかという点から助言を得ることができます。

<事例：学級経営へのサポート>

ある小学校の学級担任は、学級の秩序を乱しがちな児童への対応に悩んでいました。毎日の指導を繰り返すほど児童との関係は悪くなり、学級全体も落ち着かなくなってきたため、スクールカウンセラーに授業を観察してもらいました。そしてまずは、対象児童への指示の内容とタイミングに配慮する方向で、対応を始めました。

見る

◆ 給食を子どもと一緒に食べてもらおう

給食の時間は、ふだんの授業などでは見られない学級内の人間関係や一人一人の特徴をとらえる機会になります。また、意図をもって話しかけたり、手を貸したりすることで、個々の子どもに関わることができます。普段関わることの少ないスクールカウンセラーが直接関わることで関係づくりを進める場にもなります。

◆ 授業、学校・学年行事で子どもと関わってもらおう

心のアンケートの結果、気になることがあったり、日常の子どもの人間関係に課題を感じたりするときは、授業や集会などの機会を利用して、スクールカウンセラーから心の安定につながる講話や円滑な人間関係を築くためのエクササイズなどを実施してもらいましょう。子ども同士や、先生と子どもとの信頼関係づくりを進めることができます。

<事例：生徒の自主的な取組へのサポート>

ある中学校では、2年生を立志の学年と位置付け、生徒の自主的な活動を引き出しながら、将来への見通しをもたせる取組を行っています。有志からなる立志実行委員が、夏休みを利用して、地域の大人の方々を講師に迎え、「人生の先輩から学ぶ会」を企画しました。スクールカウンセラーには、実行委員と一緒に会に参加してもらい、会の後には、実行委員にお話をしてもらいました。また、実行委員の意識を学年全体に広げるため、今後、先生が会の成果をどう生かし、実行委員をサポートしていくとよいかの助言を得ることができました。

関わる

◆ 授業参観や意見交換会で、学校と地域をつないでもらう

地域の方など、外部の人を招いて授業参観を行ったり、その後に意見交換会を設けたりすることは、ふだんとは違った視点から、子ども理解を進める機会になります。その際、参加者にスクールカウンセラーの意見を聞いてもらうことは、スクールカウンセラーの専門性を外部の人に知っていただくよい機会にもなります。

◆ 小中連携会議で小・中学校をつないでもらう

小学校と中学校に在籍する兄弟姉妹が、共に不登校状態であったり、問題を抱えていたりといった事例が見られます。それぞれの学級担任や養護教諭、管理職が集まり、スクールカウンセラーを交えた情報交換や相談の場をもつことは効果的です。

＜事例：外部の関係機関を招いての授業参観と意見交流＞

ある小学校では、校内で行う研究授業の折に、民生児童委員や警察、地域の方にも授業を見ていただきました。授業後には、それぞれの立場や視点から感じたことや気になったことなどについて、意見交流の場をもちました。児童理解や先生の指導、支援の在り方について新鮮な目で見直す機会になるとともに、スクールカウンセラーの助言により、学校の先生たちの苦労や努力を地域の方々に理解していただく場にもなりました。



つなぐ

整える

◆ 生活アンケートへの助言をもらう

定期的な生活アンケートは、子どもの状況に応じ、ねらいを明確にした上で、スクールカウンセラーの助言を得ながら方法や質問項目を見直すといいでしょ。さらに、その結果をもとに、集会の内容を考えたり、発見された課題の解消につながる話をスクールカウンセラーから子どもにしてもらったりすると効果的です。

◆ 校内研修の講師になってもらう

学校での子どもの様子や行事の在り方などから、専門的な視点からの気づきを伝えてもらったり、子ども理解に役立つ最新の情報を提供してもらったりするための校内研修の場を設定しましょう。子ども理解に関わるテーマでのワークショップも、力量向上に役立ちます。

＜事例：中学校への進学を前にした6年生へのアンケート＞

ある小学校では、6年生の学年末に児童の思いを把握する全員アンケートを実施しました。そのアンケートをスクールカウンセラーにも目を通してもらった結果、中学進学への不安を一掃する必要があるとの助言があり、学年集会でスクールカウンセラーから話をしてもらいました。

Q スクールカウンセラーに未然防止の取組をしていただくような時間がありません。どうしたらよいのでしょうか？

A スクールカウンセラー来校日のすべての時間が、相談の予約で埋まっていますか。「予約でいっぱい」は、スクールカウンセラーを有効に活用できていないことの表れです。全校児童生徒のためのスクールカウンセラーであることを認識したいものです。「6コマのうち2コマ空ける」「年間2時間は校内研修の講師をしていただく」など、計画的に未然防止に向けた活動の時間を確保しておきましょう。

Q スクールカウンセラーとの効果的な連携の上で、注意することはありますか？

A スクールカウンセラーと学校との間で、必要な情報が共有されていなかったり、互いの役割が不明確なまま相談を進めたりしていると、教育相談の効果が薄れたり、新たな問題が発生してしまったりすることがあります。

それを防ぐためにも、以下の点について確認しましょう。

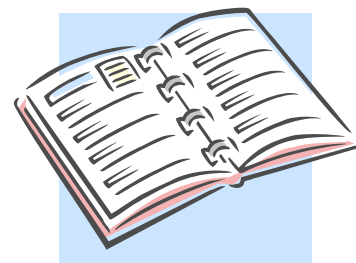
○ 職員室にスクールカウンセラーの席がありますか。

スクールカウンセラーの居所が常に相談室というのでは、いつまでたっても教職員とのつながりは生まれません。お互いに顔を知らない状態では、情報共有を図ることも困難です。お互いがチームの一員であるという意識から効果的な連携が生まれます。

○ スクールカウンセラーから相談日の報告が確実に提出されていますか。

教育相談活動は、学校とスクールカウンセラーの双方で行うものであり、スクールカウンセラーにお任せするものではありません。管理職や教育相談の担当者、相談を受けている児童生徒の学級担任は、スクールカウンセラーの相談に関わる事柄について、必要な情報を共有しなければなりません。時間の制約があり、十分な懇談の時間がもてないからこそ、「記録ノート」「日報」など、それぞれの学校の実態にあった形を工夫しましょう。

特に、学級担任や教育相談の担当者は、スクールカウンセラーに積極的に関わり、教育相談の事前と事後には、対象者の状況や相談内容についての情報交換を確実に行いましょう。



※ スクールカウンセラーの基本的な役割や職務については、「学校教育相談体制におけるスクールカウンセラー・ガイドライン」（愛知県教育委員会義務教育課）を参考にしてください。

発行 平成25年3月